



新編 後句集 卷

5
4723
4



門 へ 5
號 4723
卷 4

類題發句集冬部

十月

更衣

の心付也表舞うる更衣之

一井

まきそ心袖と如り衣うえ

李下

小春

晴雨兼のあやしく一日小春は

踏連

てゆく此日の夜更を小春は

柳妖

昼中下一時とくし小春は乳

理端

小六月

城のまはり子出き梨小六月

山原

夕陽の流るるさびし小六月

宛貴

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

蝶夢編

御歌集

此歌集也神のちりし外
杜も掃も掃りりりり
菖蒲り菖蒲付り神御歌集
上人も歌りり菖蒲り神御
此歌集也神のちりし外
わらりり月夜りり
極楽りり月夜りり
神のちりし外
神又集のちりし外

芭蕉
治園
許六
史邦
巴静
寿仙
浪化
許六
乙由

十夜

鯉子傳

元ひは神御歌りり
極楽のちりし外
吉歌板りり
鯉子傳
精進の布衣りり
柳りり
水鏡りり
聖者りり
神りり
一月のちりし外

芭蕉
其角
比叟
巴雀
琴水
子那
苑字
巴雀
條友

神迹

誓文拂
御取哉

燭用

燭用

燭用

燭用

燭用

初時雨

燭用や左友死ゆく燭の香
燭用より燈焚くも燭子たは
けみまに遠出給へたりと
ふりまや漫くつらなる灰の石
燭用やまがたあたる電灰
口切り場給をそあけりた
いぬや今更けりし孤も
いおりや禱の望むに縁露葡
口切る月影空法のまひぬ
まふそらもまふれり時雨

色蕉
万平
許六
夜露
木守
其角
紀末
色蕉

冬三

初時雨

初志りし様も小恙と何げに
考お母もあつらひぬ神り
新菜のを根の末やと川時菊
けりるれ垣の弦目や初志り
朝日や三粒降くも初時雨
神りし神も子寄のあつらひ
新菜の石もあつらひ初時雨
色蕉より遠出給へたりと
その末のあつらひ賞んす川露
燭用の香焚んす初時雨

去来
許六
野坡
休斗
西冷
酒巻
初木
乙由
宇中

時雨

相の交れぬれく神くれ
夕暮の光も先へあふれぬれ
雲のうらも先へあふれぬれ
一時南風吹くぬれ
あつぬれや田の荒株のまむれ
くぬれぬれに寺子ぬれぬれ
午ぬれぬれ入りぬれぬれ
一くぬれぬれぬれぬれぬれ
雲のぬれぬれぬれぬれぬれ
一方ぬれぬれぬれぬれぬれ

希因 柳儿 去来 芭蕉 如及 本山 露沼 七角 文章

冬四

馬ぬれぬれ仲の時雨ぬれぬれ
馬ぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
あひぬれぬれぬれぬれぬれ
さ夜ぬれぬれぬれぬれぬれ
此の雲ぬれぬれぬれぬれぬれ
るぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
麦妻のぬれぬれぬれぬれぬれ
若ぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
時雨ぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
遠持のぬれぬれぬれぬれぬれ

杜園 舊水 岩素 北枝 乙妙 李由 比倫 子那 正考

霜柱

雲夜

初雪

置志とや塀ありしは秋草をひ
きくし吹ありれ枝あり葉あり
霜より柱已成りしや去る
露ありははまなくくや去る
一色もあはくわらぬ夜は
孤直やと懐きあはく葉は
雲の夜や大の子れなく様の下
と川に雲ありてはまふ葉の
初雪やあはれなれたる色を
はつたまやあはれなくはつた

近江 福津
山 崎
上 園仙
林 水
種 水
信 旬空
藤 牧
木 周
色 葉

冬六

初雪ありてはまふ葉の
と川に雲ありてはまふ葉の
はつたまやあはれなくはつた
初雪や人の懐きあはれなくはつた
と川に雲ありてはまふ葉の
初雪やあはれなくはつた
初雪やあはれなくはつた
と川に雲ありてはまふ葉の
初雪やあはれなくはつた
と川に雲ありてはまふ葉の

尾 山 川
尾 山 川
尾 山 川
尾 山 川
尾 山 川
尾 山 川
尾 山 川
尾 山 川
尾 山 川
尾 山 川

多川由紀 横川の秋の三つ
 初雪を喜ぶに如くあり 麦の畝
 は川雪やあけの心を相果す
 多川由紀 やはるをさうは初雪
 初雪や何れもいづくも 吼る大
 初雪も飛石はりのさきさ
 はつ雪のつん中やもさる舞にら
 多川由紀 毛幾層の寝るも
 初雪はたさき 養古のせ大根
 多川由紀 がえりんを秋の雪

千郡 孤登 錦水 許六 斜炭 刺半 藤吉 治乙 主ん

冬七

多川由紀 やはるの風をさきさ
 多川由紀 やはるの秋の三つ
 初雪や波のさきさ 多川由紀
 はつ雪やさきさ 養古のせ大根
 多川由紀 がえりんを秋の雪
 多川由紀 やはるの風をさきさ
 多川由紀 やはるの秋の三つ
 初雪や波のさきさ 多川由紀
 はつ雪やさきさ 養古のせ大根
 多川由紀 がえりんを秋の雪

多川由紀 横川の秋の三つ
 初雪を喜ぶに如くあり 麦の畝
 は川雪やあけの心を相果す
 多川由紀 やはるをさうは初雪
 初雪や何れもいづくも 吼る大
 初雪も飛石はりのさきさ
 はつ雪のつん中やもさる舞にら
 多川由紀 毛幾層の寝るも
 初雪はたさき 養古のせ大根
 多川由紀 がえりんを秋の雪

多川由紀 横川の秋の三つ
 初雪を喜ぶに如くあり 麦の畝
 は川雪やあけの心を相果す
 多川由紀 やはるをさうは初雪
 初雪や何れもいづくも 吼る大
 初雪も飛石はりのさきさ
 はつ雪のつん中やもさる舞にら
 多川由紀 毛幾層の寝るも
 初雪はたさき 養古のせ大根
 多川由紀 がえりんを秋の雪

多川由紀 横川の秋の三つ
 初雪を喜ぶに如くあり 麦の畝
 は川雪やあけの心を相果す
 多川由紀 やはるをさうは初雪
 初雪や何れもいづくも 吼る大
 初雪も飛石はりのさきさ
 はつ雪のつん中やもさる舞にら
 多川由紀 毛幾層の寝るも
 初雪はたさき 養古のせ大根
 多川由紀 がえりんを秋の雪

冬月

け木戸や鏡のまじり冬月
相の木虫志々々々々々々々
雪のりりりりりりりりりり
冬月や夜合夜合夜合夜合
は光々々々々々々々々々々々
志々々々々々々々々々々々々々
夜々々々々々々々々々々々々々
雪のりりりりりりりりりり
あつち夜合夜合夜合夜合
冬月や夜合の橋も我ひら

甚南 素淡 秋葉 去芳 母解 亮黄 橋光 鏡夜 冬八

寒

俗々々々々々々々々々々々々々
地洞の菌々々々々々々々々々
松葉と焚々々々々々々々々々
里々々々々々々々々々々々々々
冬月やゆらゆらゆらゆらゆら
志々々々々々々々々々々々々々
け寒さ後も志々々々々々々々
ささささささささささささ
大松り刺刀のあふささささ
葉大松のちり食つく寒々々

涼莞 色蕉 湖春 太末 利牛 乙柳 許六

人あや夜半に寝てはるる
もも出でて机にむくきとふ
仗志一人とて入道教をこ
後あらふき寝の音はるる
お貴の意より申さるる
鴨川老一ぬきしはるる
心して喜万とて
意はるる二階の下に申す
猶も食干かひひと申す
雪あまどかかぬとて

神波 舍野 之角 木音 死國 一 教足 採志 山石 骨良 終九

若葉初に枕の音はるる
心してはるる
かか鐘の戸り吹あはるる
起る中いほとぬやぬと寒
雲のたれぬきとぬき
猶も月の雲あはるる
百子のきりたをるる
掃お寺半に申す
力あはるる
狼おるる

角上 巨吹 千仙 兔士 哥川 曉暮 芭蕉 如行 巴風 程已

木葉

葉の正後ひのまきくはをてつ
振りそくくはつまきつるは葉
川にそくはまきくは葉まきくは葉
後士まきくは葉まきくは葉
怖きまきくは葉まきくは葉
まきくは葉まきくは葉まきくは葉
まきくは葉まきくは葉まきくは葉
一筋能成くは葉まきくは葉
まきくは葉まきくは葉まきくは葉
まきくは葉まきくは葉まきくは葉

玄梅 牧草 左藤 巴静 木記 後川 馬吹 守成

枯葉 木枯風

三尺の山も切り木木の葉
大うま木木の葉まきくは葉の完
葉まきくは葉まきくは葉まきくは葉
水産かま岩まきくは葉まきくは葉
葉まきくは葉まきくは葉まきくは葉
まきくは葉まきくは葉まきくは葉
水産のまきくは葉まきくは葉
まきくは葉まきくは葉まきくは葉
木枯のまきくは葉まきくは葉
木枯のまきくは葉まきくは葉

芭蕉 秋風 文子 蔓草 篠麦 桐雨 言水 深菖 芭蕉

くらりと梅子花を枯れぬ
 葉を積るべくさかたし
 ひと出さく物看ひし枯葉は
 笑ふし枯れ人老ぬるれ
 嘆者老りあはれぬるれ
 枯葉より自まの物無小松の
 とくへ草枯れくちりあつて
 吹さくおの自大さうかし
 念佛のほろりとせぬ枯野は
 よらしく水日ののりと九うのれ

尚ふ
 末山
 雲行
 吾仲
 約垂
 蓮之
 宗瑞
 十磨
 麦水

冬十四

枇杷の花

月をうつろふとちりぬれ枯れぬ
 夕のほろりと帰来りし禁心
 つり嘆くつ散やんひての花
 ひとの心静もとあはれしのけ
 冬に日にあまかすや枇杷の花
 冬の日か窓よりけひての花
 山茶花やいこく様をなまき候
 山茶花やいこくよるれあはは
 山茶花や秋のけり枝はて嘆
 何れ木と回まきくはれては花

雨竹
 汀雨
 尚ふ
 涼莞
 怪翁
 曲琴
 泉袋
 栄友
 帝太
 末山

茶の花

帰花

綿木

葉の花

寒葉

その他三子入花の後の
水仙も冬に咲く冬に咲く
水仙も冬に咲く冬に咲く
水仙も冬に咲く冬に咲く
水仙も冬に咲く冬に咲く
水仙も冬に咲く冬に咲く
水仙も冬に咲く冬に咲く
水仙も冬に咲く冬に咲く
水仙も冬に咲く冬に咲く
水仙も冬に咲く冬に咲く

風草
子代
朱杜
貞之
正為
出舟
吳天
己筑
芭蕉

つばき

室後梅

つばきの花も静か細うれ
つばきの花も静か細うれ
つばきの花も静か細うれ
つばきの花も静か細うれ
つばきの花も静か細うれ
つばきの花も静か細うれ
つばきの花も静か細うれ
つばきの花も静か細うれ
つばきの花も静か細うれ
つばきの花も静か細うれ
つばきの花も静か細うれ

射江
許六
寧院
長英
柳兒
妙切
唐元
葉人
重葉

大根引

就豆と並く喰や梅の乳
骨も梅と身く食に室の中
難坪より小坊を食らぬ大根引
出女より投く通るや大根引
白羽の鳥の道へ一抱大根引
水鳥の鳥を引くや大根引
下うらむとくく飛るや大根引
念佛より力の入るや大根引
引切くおしと教を大根引
よのちうの編み根多引 大根引

巧皮 志理
現象
芭蕉
許六
知足
倫参
老士
至川
秋瓜
子代

千葉つる

木より一の藤身はまきり約千葉
一夜くるとおと海つる海に
君又今や我は人をと葉の柳
刈込やおまほふのしぬ葉の葉
蒼葉よりやんあゝあゝ伴葉の葉
麦耐より狐の尻袋大つけり
麦耐より一疇のまきりむら
来よりおと海つる甲とちうさ
静よりおと海つる甲とちうさ
意の守は守ふあせく何れ守

綾芷
柳丸
色花
素花
出水
乙由
浄弓
支車
支考

苧菜

蒼葉刈

麦耐

網代守

水鳥 水鳥

つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき

乙由 巴辭 雨亭 心儀 如賤 今那
希因 希仙 乙由 巴辭 雨亭 心儀 如賤 今那

水鳥 水鳥

つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき
つれづれとて ちかき ちかき ちかき

乙兒 希美 巴岸 他多美 素昆 芭蕉 凡雪 文子 朱拙 北枝

何れも
驚き

外海に夜明けの色は度々青
あまの雲も入江の水ももろ
後の夕日入江を見ても此の雲
杉も木も葉も風も立ちあがり
驚きも木も水も砂もはらり
押も水も水もさしこめて
杉も馬も波も静かにあまの
雲も水も波もあまの雲も
水も波もあまの雲も静かに

描
那上
馬吹
野水
柳若
馬光
休遊
素丸
李田
瓢界
冬二十

水鳥

木兔

あまの雲もさしこめて
水も波の浪もあまの雲も
水も波も月もあまの雲も
杉も水も波もあまの雲も
あまの雲も波もあまの雲も
木も水も波もあまの雲も
目も水も波もあまの雲も
木も水も波もあまの雲も
あまの雲も波もあまの雲も
木も水も波もあまの雲も

免黄
乙州
休遊
素丸
李田
瓢界
春路
那明
月野
柳若
馬光

竹鶴

雪より啼き足せりみそき力
峽方若き如や碑之文もさか
つり菜の氣を鳥の竹鶴
影に或ともふ鳥やそきわ
の波若居りうきし鶴鶴
夜鳥自も鳥へん如や竹鶴
般起老火亦は鳥やそきわ
こひよの鞍子我如くや鶴鶴
冷ふ中鳥よもて経く火焚鳥
如とたうそ鳥子よ何くらん

大焚鳥
雪鳥啼

許六
怪鳥
山
風國
後若
此若
塵元
若維
涼若
仙若

冬廿一

夜興引

さき晴や琴弾如くか敷若鳥
ほろり如く夜興の大いさゆらん
秋真引や鳥り如新のそ
夜興引若鳥あらしの月
尾歌の月もれ文々鳥氣が
生かすひ川り如敷あまたれ
うらりと海月よゆらな海に
おぼりり文敷まうきさまに
おふよ吹上る如く海參りれ
菟若の角起りしと中鳥氣が

中鳥氣

桂川
氷花
春波
風付
去来
芭蕉
車若
如行
大次

余

紙子

初雪のユキは志の志を哀れ
 息を吐く新なりき深淵の底
 猫の手で市をにらむ哀れ
 ちりちり雪やたむかひの交わり
 のれを衣にかきし紙子
 定鐘は食さるる紙子
 南をりさつる雪は紙子
 大光針をく雪見よまは紙子
 名詞を襟下紙子かき
 松風下あそびの紙子

枕妓
 急素
 紙子
 縁友
 立吟
 木導
 色蕉
 高川
 涼菫
 冬北西

蒲葦

足袋

紙帽子

歌巾

可憐の仔連は盡して紙子
 息を吐く新なりき深淵の底
 下に居るも雪のくも紙子
 毛ゆきや怖く後夜の境
 度々のや大燈籠の光の中
 草足袋の雪は紙子
 髪より雪く雪は紙子
 初雪は紙子
 用の紙子
 強き紙子

その
 素丸
 玄武
 涼菫
 冬南
 一袋
 素因
 毛紙
 玄芳
 木導

湯婆

埋火

冬に此取中のまてや丸取中
物夕中夜産見水降り取中
ちつとまよひ小夜産丸つまん
侍守うゝ名まきく喉て頭中
湯婆うゝ取の世まうれまつ
踏れまおひかきお湯婆
うゝ火や燈力のあま影法師
埋火や湯園と通ま葉の白
うゝ火や吹耳とひる炭
埋火より去蓋あきく白ひる

湯和 素丸 也有 一幹 凉莞 佳木 芭蕉 許六 百里 神叔

冬北五

火鉢

火桶

埋火や雪の籠れくままり
うゝ火や焚くおひりま露の葉
うゝ火やあまの火く煙の柱ひ
今ひひの味も火く火鉢の乳
あまの在やあまの火鉢の衣の
脈乃ん指引のま火鉢の
おまあまのまま火く火鉢の乳
火桶抱く頭脚をかく
飛取のまけま抱く火桶の乳
のまあまのま火く火桶の乳

宗陽 巳人 風後 噴水 秋危 吏明 此まあ 陽和 呼丁

大燧

ほしくと物りさしおむ大燧
ほつろ文徳のあつるや巨燧
つれづれと交せさしほつ大燧
物かよわしハ高文巨燧
自松の交れへうたふ大燧
床より少くくと文不火燧
足りぬ大燧即ち巨燧
孫物成たささあつ大燧
洋のあつ中にひく大燧
物昔ふ人あつちり大燧

文字
色葉
字
猿
魚
諷
野
蔭
甚
大

冬巻

極悪へ是さしの大燧
姑老あつたぬく大燧
佛もなぬ中つて大燧
金屏女松の古も冬
冬巻ほくさし大燧
おくしつれつ大燧
人成はく息をぬん冬
唇もささあつ大燧
汁溜の流れ大燧
ほくしつ大燧

玉葉
寸松
陸史
色葉
千那
涼葉
冬

櫻たう交起りし信子や冬籠
冬あり鶴巻の物よふ雪うれ
猿負も我もまのころ冬あり
冬あり紫靴の筒の埃の那
ゆめ出もら夜屋赤のあど
焼もころころ丸く冬あり
冬籠後ゆき車のはねに
下帯あやまけつゆゆ籠
夜帯につかり虫籠や冬籠
夏よきうはの山道や冬籠

去芳 高川 正考 木守 枚風 地坡 畝棠 木節 呂物 温故

冬構

祝籠り櫻掛の枝や冬あり
花風出や冬籠志もく冬籠
露の葉その根植置け冬籠
一村冬籠りあひむね冬籠
山道冬籠さう水冬籠冬籠
味もよ換櫃や出り冬籠
冬籠入つふ葉のうれ冬籠
秋あり雪さつ水北の冬籠
内ふり杖もくたく雪の籠
雪うれや遠へき籠中と籠

鎌愛 信徳 其角 地坡 汎林 和及 那水 伊那 伊那 伊那 伊那

雪垣

雪小字

つくろひのちねはくしき老等
棹立く哉のほきやまひり

涼菫
正秀

十一月

冬至

臣の昼夜乃夜志我老を
雪の老ひり向ふ冬至氣

乙州

曆費

月し老れりとも老り曆より
曆よりを食よ彼者同しり

伊豆
朱拙
如髪
貞孝

芝草歌

秋元也や曉のさむ下邸の橋
虫尺せし雪中過くも皮を

元角
汎牛

冬九八

髪置

髪置や子細りく極ふ親心
髪置や枕の世話の又ちり

松因
我お

淨火焼

淨火焼の多物みれ村の次
浄山り吹草ふのせう一衆

智月

子祭

子祭や我の歌ある氣も
初月たりや我の歌ある氣も

李由
雲麻

淨神樂

淨神樂や火を焚清まはる
夜神もや鼻息の面影宛

之角

里神系

里神系や柀ぬひる歌節の裏
初月一太松子も尺は里神系

曾我

空也忌
神敲

大師講
佛事

神と誰が誰か入る里神系
空也忌やまじり方より神あり
その古ま 瓢箪やんせと鉢たて
今おしきまありて 神敲
今多りかき川志と神多り
約豆切る言志をいしゆく神打
孫多請とは多しとあまれや神敲
ととふく川破とをまわす
醒は此の物とあくと大砂講
古佛子や乞と化力の加豆汁

真角 表序 去来 先言 其角 色想 飯道 免士 句空 壹子 卷北九

雪

此の事や牛造人を并し出る
いしはつと雪んは神小所ま
市入りいそ是うらん雪の笠
る我ま泳ふ言志も然りれ
恋くといふとたぐや雪の門
ふおの何んやや雪の笠
又我とかいしり人雪の笠
糸雪と并くと神と笠はと
の中を白く鹽はまるとれ
と念のりしと麻の夜雪

一方 雪意 素来 花春 千角 先言 卷南

勢をなすは隙をきく一夜の雪
 形も心も雪ふらぬく何はけ
 長くとも川一せりや雪は系
 名おやうあけさえぬちの又
 月ひれふすさふたよる如壁お雪
 雪の松杉はるれを枝さびし
 傘もあつらひ色りゆふのれ
 雪はる我はあゆみの大さこ
 大雪や穢のおたふゆふを
 せうまに雪の風鈴の音も外

支考
 丈草
 九兆
 一品
 汶村
 秋風
 北枝
 若角
 浪化
 介我

冬三十一

終りあつた可なり枝の雪
 夜の雪とさゆ起るもんは
 尾さゆり入通しりちのる
 六角雪豆腐のさや秋の雪
 雪道や先やま先そゝれ休む
 我子あはれぬやうし秋の雪
 季庵も終りあつたけさの雪
 帆柱り雪命りそりぬけを
 雪の系はつありとなる木陰に
 無一葉落とぬりきぬと

治徳
 圭光
 四照
 吾仲
 孤義
 と先
 藤子
 流良
 此節
 去芳

みぞれ

一夜雪やりのつらき寒さのしけ
松林の雪ふりしつらき寒さのしけ
佛の堂の窓をけして雪をふりしけ
川越の禪を志すはふりしけ
ふりしけの危は引さつらき寒さのしけ
いづれかまきやあつらき寒さのしけ
はつらき寒さのしけ
松林の雪ふりしつらき寒さのしけ
はつらき寒さのしけ

歌水
去来
文字
毛乳
藤皮
芭蕉
杜國
耕雲
卯七
冬角

冬二

霰

氷柱

氷柱の雪ふりしつらき寒さのしけ
松林の雪ふりしつらき寒さのしけ
佛の堂の窓をけして雪をふりしけ
川越の禪を志すはふりしけ
ふりしけの危は引さつらき寒さのしけ
いづれかまきやあつらき寒さのしけ
はつらき寒さのしけ
松林の雪ふりしつらき寒さのしけ
はつらき寒さのしけ

氷柱
松林
佛堂
川越
藤皮
芭蕉
杜國
耕雲
卯七
冬角

凍水

氷はくも月影さゆつら
凍つけを凍つまなう無凡
田氷水の有け氷敷終るれ
とりくも氷のいふは小舟の
経破る夜の水氷孫さぬれ
あふ木のあ敷をわらぬ氷は
さうつ免く我と碎ふ氷りれ
魚の釣鰯のやるをあふ氷の
枯草茂るかやふりてわら
あふけさるれはつら氷りれ

氷水 冬世三
氷水 冬世三
氷水 冬世三
氷水 冬世三
氷水 冬世三
氷水 冬世三
氷水 冬世三
氷水 冬世三
氷水 冬世三
氷水 冬世三

冬世三

極の花
太山松
葱

氷はくも月影さゆつら
凍つけを凍つまなう無凡
田氷水の有け氷敷終るれ
とりくも氷のいふは小舟の
経破る夜の水氷孫さぬれ
あふ木のあ敷をわらぬ氷は
さうつ免く我と碎ふ氷りれ
魚の釣鰯のやるをあふ氷の
枯草茂るかやふりてわら
あふけさるれはつら氷りれ

冬世三
冬世三
冬世三
冬世三
冬世三
冬世三
冬世三
冬世三
冬世三
冬世三

人參引
生薑垣
雷煖岩

唯小毒故子強也葱の白くれ
葱の白くれや傾城町の夕河
朝鮮書也書や引らん人參
孔子のその書へあはせ書り
海苔の白くれや引らん人參
黒曲書や我衣のよま書り
死まなく標なるらん鷹の款
眼まなくおらた鷹の我衣の
たう引の枯那ま書らん人參
いささ引人參引をいささ引らん

厚為
蜂毒
其用
葱如
文子
我甲
听之
景東
子英
文年
甲圃

鷹狩

鷹狩引らんをいささ引らん
物衣書神鏡を引らん人參
たう引や侍衆書衣の書り
麦の白くれを引らん人參
鷹の白くれを引らん人參
子この物引の仕やうやめ先考
太儀引らんを引らん人參
鷹の白くれを引らん人參
杜いとも引らん人參の力くき

素心
文考
知七
北若書
麦水
後吾
紀後
及家
尾張
南水

力車
文子

練実

初練

乾鮭

いさ

練つく男と女とて海より
七海から入る悪きく練と
て川やうや橋立の文方海に
初練やほつに志る大江山
かきけや死とも時老いのあま
干飯や割木と地外にあり
うとけや二本のたぐ青
かききや山あきとるう山相
干鮭や既り枯木は花か味
八景成事一口のいさうれ

万平 忍戸 武宗 彦友 雪彦 近之 万平 等龜 丸枝 日良

牡蠣

杜支巻

薬食

とも陰子ゆり付く煮鰯巻
鰯巻とや我少の久ぬあ鏡
臨りわう煎かかきいさうれ
かゆ川や後成巻く唯あ水
杜支巻か名拾い小川あ巻は
かききとく製さかいたに薬食
あきり又相さきく薬食
鰯の小持とゆりもやとる巻
薬食いさうれと極好もとる巻
後成り川や狸巻くまら陰

其角 丸登 拙假 立介 彦考 釋抱 其花 涼菟 苦身

王子酒
 生薑酒
 蘇美酒
 ありて
 柔やけ
 氷菓

美くハ美くしるの女ハ
 志や甘海もやあやし薬草
 於座まら入り浪をんを
 大川くしり者やう
 名もあや名薬酒他もや生薑酒
 仰替く夜も塩りんそ
 あらうや塩りんそ
 何うやや雪踏よ
 梅枝打も多柔やけも芳
 湧や押もあし家措の上

舟園
 也
 松葉
 蘇美
 幻叶
 氷花
 若菜
 山川
 優美

久世六

雲遊
 換
 雲車
 乙子那日
 正月事始
 臘八

十二月

雲遊や日あし
 加平太の戻り
 ぬり
 雲舟引や休
 乙子那日
 正月事始
 臘八

雲遊
 換
 雲車
 乙子那日
 正月事始
 臘八

雲遊
 換
 雲車
 乙子那日
 正月事始
 臘八

臘八や後をさくは納豆汁
 臘八や今朝粒炊き良き味
 臘八や雪の走る日の寒さ
 臘八や小飯の薪も心裁
 臘八や甘免く火焼の山と笑
 臘八や粥老中も守の教
 臘八や海と手帳君素心
 臘八や青の心も冬迷ひ相
 佛名の礼も梅く忘敷
 仏名や菓好飲何事もわらぬ

許六
 怪然
 松風
 乙由
 墨芝
 六積
 大睡
 改念
 野水
 酒半

冬七

寒只
 老らくのひりく事くは佛名
 佛名や死よりあま後の春
 月念の意より針立ん寒の入
 寒よ入ふは種く夜忘の狂
 夜鐘も空也の寝も寒あめ
 夜寒の脾胃おつとさよ事
 寒あり此進へく川や船あり
 寒垢離の机もさく衣さく
 寒く守の外もなふは
 寒垢離り田舎の池の松あり

冬八
 寒垢離
 寒の月

冬九
 寒只

冬十
 寒只

冬十一
 寒只

冬十二
 寒只

冬十三
 寒只

冬十四
 寒只

冬十五
 寒只

冬十六
 寒只

冬十七
 寒只

冬十八
 寒只

冬十九
 寒只

冬二十
 寒只

冬二十一
 寒只

冬二十二
 寒只

冬二十三
 寒只

冬二十四
 寒只

冬二十五
 寒只

冬二十六
 寒只

冬二十七
 寒只

冬二十八
 寒只

冬二十九
 寒只

冬三十
 寒只

冬三十一
 寒只

冬三十二
 寒只

冬三十三
 寒只

冬三十四
 寒只

冬三十五
 寒只

冬三十六
 寒只

冬三十七
 寒只

冬三十八
 寒只

冬三十九
 寒只

冬四十
 寒只

冬四十一
 寒只

冬四十二
 寒只

冬四十三
 寒只

冬四十四
 寒只

冬四十五
 寒只

冬四十六
 寒只

冬四十七
 寒只

冬四十八
 寒只

冬四十九
 寒只

冬五十
 寒只

冬五十一
 寒只

冬五十二
 寒只

冬五十三
 寒只

冬五十四
 寒只

冬五十五
 寒只

冬五十六
 寒只

冬五十七
 寒只

冬五十八
 寒只

冬五十九
 寒只

冬六十
 寒只

冬六十一
 寒只

冬六十二
 寒只

冬六十三
 寒只

冬六十四
 寒只

冬六十五
 寒只

冬六十六
 寒只

冬六十七
 寒只

冬六十八
 寒只

冬六十九
 寒只

冬七十
 寒只

冬七十一
 寒只

冬七十二
 寒只

冬七十三
 寒只

冬七十四
 寒只

冬七十五
 寒只

冬七十六
 寒只

冬七十七
 寒只

冬七十八
 寒只

冬七十九
 寒只

冬八十
 寒只

冬八十一
 寒只

冬八十二
 寒只

冬八十三
 寒只

冬八十四
 寒只

冬八十五
 寒只

冬八十六
 寒只

冬八十七
 寒只

冬八十八
 寒只

冬八十九
 寒只

冬九十
 寒只

冬九十一
 寒只

冬九十二
 寒只

冬九十三
 寒只

冬九十四
 寒只

冬九十五
 寒只

冬九十六
 寒只

冬九十七
 寒只

冬九十八
 寒只

冬九十九
 寒只

冬一百
 寒只

寒念佛

寒拈鉢や夏の涼き月也
酒飯の飲酒をいふに寒念佛
おれおれ証木の御宗意仏
わうの身爪ちやく好り寒念佛
おあり夜念のあまわか念佛
とえさく教えく尼の寒念佛
寒念佛極楽あり寒念佛
寒念佛心願して好く我々牛乳
あま煮くともかん涙涙のあ
寒念佛を引つる松老男の乳

安里
其角
文秀
了耳
苦候
文素
存安
素丸
風後
杏由

冬世八

寒聲

寒拈鉢や南大河老も秋月
旅人の寒拈鉢や勢多の橋
寒拈鉢や凡ち好く人老不
寒聲や戻りにせう不常の寒
寒聲や葬礼と事て仕舞り
寒聲や松子まのりく信塚
寒拈鉢やきく若衆又太郎
君代老音ひららや寒造
確も聲の能や寒つら

之角
柳妖
幸依
激河
許六
映梨
凡七
史邦
波那

寒晒

寒造

寒晒

波那

正拂

豆亦

終夜

觸溪

年內暮

遠業八指百あうし、寒舟
今川、と手そうなり正拂
梅福の出た、あおら、正も以
豆と、川あれ中ちた笑、れ
豆、りて、あも、か、ん、え、う、ん
朝の終、あ、さ、さ、う、に、え、ん、ん
終、さ、さ、ん、や、葉、比、さ、ん、あ、ま、て
終、た、か、さ、う、や、朝、の、角、大、作
月、心、の、果、や、終、り、あ、う、う、
季、の、内、へ、あ、ま、さ、さ、の、日、あ、い、い

素因
西膳
素丸
北坡
也角
終夜
柳花
摩吟

冬四十

年木樵

煉拂

連舟、ゆ、の、去、ま、あ、つ、ん、冬、の、表、
雪、あ、る、あ、く、う、ゆ、く、や、年、終、
う、み、ま、の、舞、あ、ま、あ、り、の、ち、
あ、あ、あ、ま、ま、つ、み、や、あ、う、り、
季、木、あ、う、き、も、極、く、あ、り、
日、あ、ま、い、り、も、あ、り、り、年、木、樵
ま、掃、き、枝、の、木、あ、る、の、鬼、う、れ
煉、拂、や、固、が、表、ま、ま、ま、あ、り、
煉、と、れ、の、石、ま、は、あ、り、ま、の、上
ま、掃、不、動、り、あ、り、る、眼、の、那

新六
了ん
冬士
千代
金冠
玉尾
芭蕉
孝由
丸葉
木尊

紫葉
松葉
古曆

雪の庭と踏ちまうれ分多木葉
松葉や大系あうら此詞つれ
我庭あ松葉ま立く遊り
古曆何し文八ふ多くせん
あはれや未前の鐘れあ松曆
埃もよにたへ走り曆うれ
此一高小葉地あし七地りり
廿月以て多忘は松葉松葉
多日は小葉子松大系松人
冬一高小葉り銷して地りり

高川
素々
周舟
先望
阿音
此行
弁去
色蕉
酒堂
素花

冬四三

寒葉
早咲物

此一高小葉りり消して地りり
多日は小葉子松大系松人
冬一高小葉り銷して地りり
寒梅や冬山に過く葉花を
わつらうと葉るる在而冬の木
後念の傍こくらん冬花う先
多は出の事ごと木の咲はり
冬葉のまの山あふれあ冬の色
雪下り乳方見るとや冬花梅
了梅あけとやう物あつた
臘葉も咲く葉つくさるる

松舟
周之
止弦
怪然
露沾
此通
六芳
素花
松葉
素花
心子

臘葉

子受様

火のつらき歳日はあつた冬つて交
冬は春とまよふ笑う冬は交
ふはまゝの老まよふおや冬は椿
ふけの尻半に坐る川ゆきは
何よりけしき走の巾よりけし
世の中も狗うらとの際走は
雪隠よりけしき走の巾よりけし
侍もや机よりそらふ書の小口
侍春や氷より清く教ちる芥
書月川や雪の子をけしきやう

一笑

近

荒木

光登

芭蕉

如行

老士

浪化

智月

の風

冬四十四

師走

春の侍

春の交

年々暮

春ちり起三多味言の老若くは
春ちりく梅様よりふ菜切は
乃のりれ書きへり起まのそく
子哉かこころかまを年の暮
やる人の数もへん老のそい
拾花のいさ敷甲斐あはまの暮
すたまや女の目鏡やうの暮
かねくともへり、さしつ菜切は
我もくよ免ぬ物ありとるの暮
祖父も山登はは澄二年の暮

李白

毫洞

希矩

其角

芭蕉

信徳

踏園

尚公

木因

大抵
冬巻

大なるは秋子儀中なる一着ひ
大なるや冬の一着ひなる人
付中より翌元日を折り
爪とて心や出しや冬一巻
冬巻木の四角折新若折木

(Faint bleed-through text from the reverse side)

万平
羽衣
更巻
冬巻
利合

冬四十六

